

新型コロナウイルス禍が1年生に与えた影響と 今後の初年次教育の課題

濱名 篤¹・田中亜裕子²

関西国際大学

The Impact of COVID-19 Pandemic on University Freshmen and Future Challenges of First-Year Experience

Atsushi HAMANA · Ayuko TANAKA

Kansai University of International Studies

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 禍から日常生活を取り戻すにはまだ時間を要する。日本の大学では10月の時点で、対面授業の実施割合は187校が半分未満となっており、これは調査対象校337校の49.6%にもものぼる (文部科学省, 2020)。

このような状況の中、多くの大学1年生は入学以来、大学にほとんど足を踏み入れることができず、思い描いていたものとはかけ離れた学生生活を強いられることになった。関西国際大学 (以下では「本学」という) の1年生も同様に、入学前後の数日間の登校の後、入校を制限された。本学では4月23日より遠隔によるライブ授業をほぼ全ての科目で開始し、6月1日に学生が遠隔か対面かを選択可能な形でハイブリッド授業に切り替えた。そして秋学期に全学対面授業へと舵を切った。

めまぐるしい状況の変化の中、初年次生は大学生活をどのように捉えているのであろうか。そして初年次生の大学適応を促進するために、大学にはどのような工夫と配慮が求められるだろうか。本稿では2種類の調査データ (①本学学生を対象とする適応度調査の2019・20年度比較, ②本学を含むCCP6調査=6私立大学学生調査) を用い、コロナ禍における1年生の現状を把握し、大学が取り組むべき課題について明らかにしていきたい。

2. 2020年1年生と例年の1年生の相違点

今年の大学1年生は例年と比べ、大学生活への適応等でどのように違うのだろうか。表1は2020年1年生の7月の適応度調査と2019年1年生の7月の適応度調査を比較したものである。この調査では大学生活全般における適応感を測定する総合的な指標として「学習面」「対人関係」「生活全般」でうまくいっているかどうかを問う3項目を設定している。この指標をみると、すべての回答で2020年1年生のほうが2019年1年生よりも低い

¹ 関西国際大学 hamanaa@kuins.ac.jp

² 関西国際大学 atanaka@kuins.ac.jp

表1 2020年1年生と2019年1年生の7月調査の平均値とSDおよびt検定の結果

	2020年1年生		<	2019年1年生		t 値
	M	SD		M	SD	
【大学適応感】						
学習面で、うまくいっている	2.58	0.77	<	2.77	0.74	-4.05***
対人関係で、うまくいっている	2.82	0.95	<	3.19	0.77	-7.10***
生活全般で、うまくいっている	2.89	0.81	<	3.01	0.72	-2.59*
【学習】						
課題の完成に十分な時間と労力をかける方だ	2.84	0.81	>	2.68	0.82	3.23**
勉強をしっかりとやる	2.72	0.81		2.80	0.81	-1.51
教わったことが身についている	2.85	0.70	>	2.75	0.72	2.19*
【自尊感情】						
自分は必要とされている存在である	2.70	0.86	>	2.59	0.79	2.33*
自分は人の役に立つことができる	2.79	0.85		2.73	0.78	1.09
【情緒不安定性】						
何となく不安になることが多い	2.72	1.00		2.71	0.94	0.16
いつも何かに追い立てられているような気がする	2.34	1.03	>	2.18	0.98	2.63**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

値を示している。学習、自尊感情の項目について2020年1年生の平均は高いか、もしくは差がないことを考えると、大学生生活全般における不適応感が今年の特徴であるといえる。なお、情緒不安定性については2020年1年生が高く、心身の健康を問う項目について7月と12月を比較したところ、12月のほうが健康度が低かった。長引く行動の制限とコロナ感染への不安は学生の心身に負の影響を与えていると考えられる。

3. 授業形式の選択は学生にどのような違いをもたらしたか

本学では6月から遠隔と対面の授業形式を学生が選択するハイブリッド授業を行い秋学期は全学対面授業へと移行した。ここでは春学期に遠隔ライブ授業を選択した学生と対面授業を選択した学生に生じた違いをみてみよう。本学の適応度調査はいくつかの領域で構成されているが、それぞれの領域毎に因子分析を行い得点化したものを分析に用いている。今回は春学期の授業選択で学生に生じた違いを明らかにするために、大学適応感、対人関係、学習、心身の健康の4つの領域の下位尺度得点の比較を行った(表2)。その結果心身の健康を示す「睡眠得点」については遠隔授業を選択した学生が高く、大学適応感を示す「うまくいっている得点」と大学における対人関係を示す「対人サポート計」については対面授業を選択した学生のほうが高かった。これらのことから、通学しない学生生活は時間的余裕を生み出し睡眠の量と質を向上させるものの、遠隔ライブ授業中心の大学生活では、大学生生活全般についてうまくいっている感覚や大学での仲間や教職員等とつながっているという感覚は得られにくいようである。

4. ハイブリッド授業から全学対面授業への移行が学生にもたらした変化

ここでは学生が春学期に選択した授業形式別に、7月と12月の大学適応感と授業について比較する。表3は対面授業を選択した学生の結果、表4は遠隔ライブ授業を選択した

表2 対面選択学生と遠隔選択学生の調査の7月平均値とSDおよびt検定の結果

	対面選択		>	遠隔選択		t 値
	M	SD		M	SD	
【大学適応感】						
うまくいっている得点	2.86	0.73	>	2.71	0.62	2.42*
【対人関係】						
対人サポート計	2.39	1.26	>	2.04	1.23	3.19**
【学習】						
授業得点	2.38	0.44		2.41	0.41	-0.74
課題への取組得点	2.78	0.76		2.81	0.72	-0.34
【心身の健康】						
睡眠得点	2.35	0.52	<	2.57	0.46	-4.85***
心身の健康得点	2.51	0.49		2.54	0.50	-0.74

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表3 春学期対面受講生の7月調査と12月調査の平均値とSDおよび対応のあるt検定の結果

	7月		>	12月		t 値
	M	SD		M	SD	
【大学適応感】						
学習面で、うまくいっている	2.65	0.81		2.66	0.81	-0.24
対人関係で、うまくいっている	3.11	0.95		3.16	0.86	-0.61
生活全般で、うまくいっている	2.96	0.85		2.90	0.84	0.71
【授業】						
授業には集中できていますか	2.21	0.53		2.15	0.49	1.49
授業は理解できていますか	2.45	0.56	>	2.36	0.58	2.12*
授業の方法や内容に満足していますか	2.54	0.57		2.47	0.56	1.36

* $p < .05$, *** $p < .001$

表4 春学期遠隔受講生の7月調査と12月調査の平均値とSDおよび対応のあるt検定の結果

	7月		<	12月		t 値
	M	SD		M	SD	
【大学適応感】						
学習面で、うまくいっている	2.61	0.73		2.64	0.80	-0.57
対人関係で、うまくいっている	2.70	0.91	<	3.02	0.92	-4.66**
生活全般で、うまくいっている	2.90	0.77		2.81	0.83	1.43
【授業】						
授業には集中できていますか	2.28	0.56	>	2.17	0.52	2.90**
授業は理解できていますか	2.46	0.54		2.40	0.51	1.71
授業の方法や内容に満足していますか	2.60	0.52	>	2.44	0.58	4.09***

** $p < .01$, *** $p < .001$

学生の結果である。加えて授業形式に対する学生評価と、学内における困りごとの相談相手について、CCP6調査のデータを用いて検討する。

(1) 大学生生活全般への適応感の変化

大学への適応感の指標である3項目について、遠隔選択の学生は12月のほうが対人関係で「うまくいっている」と感じていることが示された。これは学内で学生生活を送ることができるようになり、大学における人間関係がつかれるようになったためであると考えられる。対面選択の学生はすべての項目について7月と12月に差がなかったことから、遠隔選択の学生が、対人関係の適応感が向上したことは、秋学期より対面授業になったことによる影響であるといえよう。2019年1年生と比較して、2020年1年生は行動の制限によって大学適応感が低かったと考えられる。全学で対面授業が開始された現在においても、大学生生活全般への適応感が低い学生が数多く存在することは、春学期の授業形式によるところが大きいと考えられる。

(2) 授業に対する心理的变化と授業形式に対する評価

学習面では対面授業を選択した学生について、12月のほうが授業に対する理解度が低くなった。そして遠隔授業を選択した学生については12月のほうが授業に対する集中度、満足度が下がった。さまざまな制限がある中で行われている対面授業よりも、ハイブリッド授業のほうが授業に対する理解度、集中度、満足度が高くなっている。この結果は何を意味しているのであろうか。学生の立場からハイブリッド授業を眺めると多くメリットがあることに気づく。自分に合った授業形式を選択可能であり、講義資料を確実に得られる(資料がネットワーク上に格納されている)という安心感があり、録画された授業については復習も可能であろう。しかしながら学内の人間関係を構築し大学への適応を促進するためには、学生の通学機会をできるだけ多く保つことが必要であることは言うまでもない。一方でハイブリッド授業に対する学生の評価を対面授業に反映させることで、より質の高い授業を提供できる可能性がある。

授業形式についての評価は様々な調査が行われているが、ここでは CCP6 (Consider Corona Project 6) という大学間連携プログラムで11月下旬に実施した学生調査結果を用

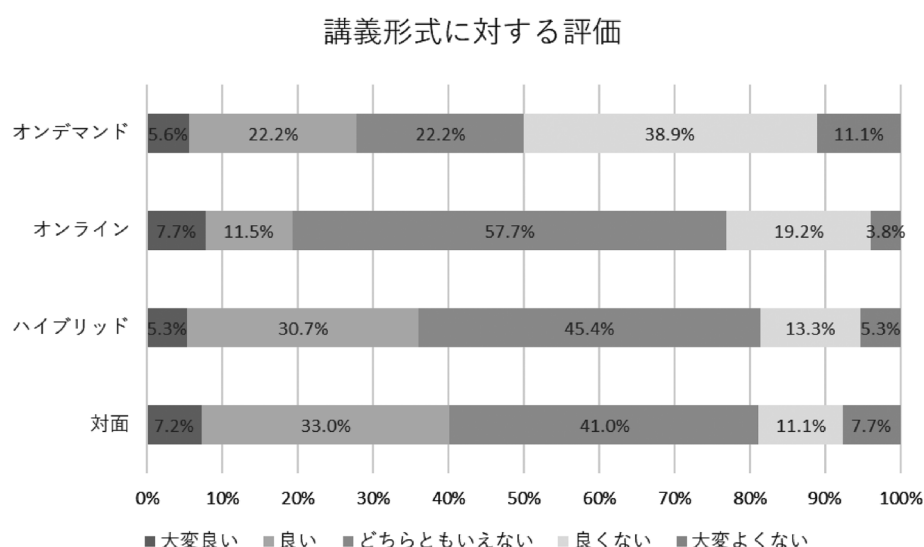


図1 現在の授業形式に対する評価 (CCP6 調査)

講義形式に対する不安

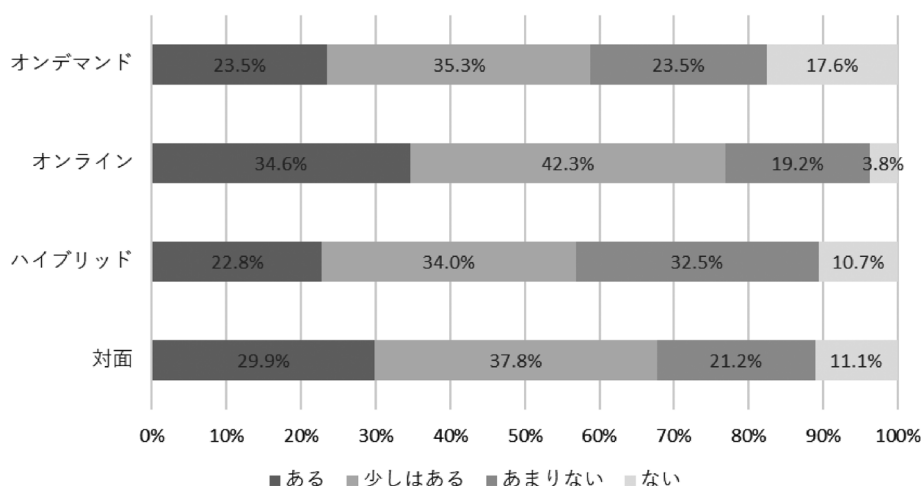


図2 それぞれの授業形式への不安 (CCP6 調査)

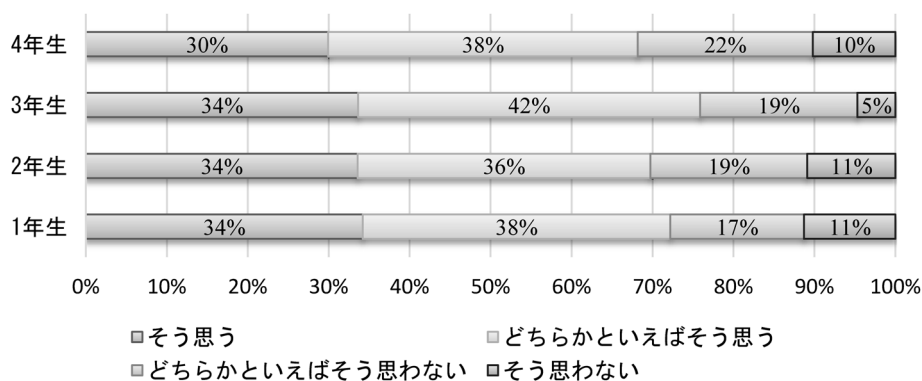


図3 知識・スキルが本当に身についているか不安な者 (CCP6 調査)

出典：「新型コロナウイルスによる学生生活への影響に関する調査」報告

調査時期：2020年11月23日～12月10日

調査方法：google フォームを使ったウェブ調査

調査対象：淑徳大学，共愛学園前橋国際大学，富山国際大学，関西国際大学，宮崎国際大学，名桜大学，1～4年生。回答数 1,245

いる。この学生調査は、関西国際、名桜、宮崎国際、富山国際、共愛学園前橋国際、淑徳の6大学の学生が、コロナ禍で社会がどう変化し、今後どう変化していくかを研究する大学間連携プロジェクトの一環として、6大学の学生を対象に「新型コロナウイルスによる学生生活への影響に関する調査」として実施したものである。

これらの中小規模校の学生での評価をみると、いずれの形式でも評価は分かれており、一概にどの方式が最適とは言えない。同じ名称でも授業方式は大学ごとに異なるし、担当者や科目によっても違いがあり、評価自体が難しいが、オンデマンド方式に対する評価がもっと低くなっていることが注目される。さらに、図2のように、どの授業方式についても不安を感じる学生が一定数は存在する。つまり、どのような授業方式であっても不安を感じる一定層の学生は今後も存在し続ける可能性が高いということであろう。「安全」というのは、地震、台風などの自然災害のように、定量化した尺度に程度を可視化して「客

観化」することができるかもしれないが、「安心」というのは主観的な事項であり、個人差が大きいということかもしれない。

こうした不安が伴う学習状況にあって、1年生にとって最も大きな不安となっているのが「知識やスキルが本当に身についているかどうか」ということである。図3のように、学年別に比較してみると、どの学年でも6割以上がこの不安を抱いているが、とりわけ1年生でこの不安を抱くものが多い。遠隔授業での学習が多かったことによるものであると考えられるが、学生は友人たちとの授業中のグループワークや反応を目の当たりにすることにより、知識やスキルを「身についた」という実感を得ていることがうかがえる。

(3) 困りごとの相談相手

大学の授業に関して、わからないこと、困っていることを教員に相談できているかを問う項目では、7月と12月を比較すると割合に変化はなく、20%以上の学生が「相談できていない」と回答している。また、授業以外の大学生活全般については、7月に比べ12月のほうが相談する人がいると回答している割合が80%から90%に増加した。

授業以外については、「授業以外の大学生活全般について困ったことが相談できる人」は7月時点でも8割以上いると答えている。この結果については、CCP6の調査結果を参照しておこう。相談する相手としては「親」

表5 困りごとの相談相手(複数回答)

相談相手	割合
親	65.4%
クラスの友人	52.2%
昔からの友人	44.0%
兄弟	25.6%
同じゼミの友人	21.3%
バイト先の友人	14.9%
先輩・後輩	13.4%
大学の教職員	12.8%
部活動・サークルの友人	12.4%
SNSで知り合った友人	5.4%
相談しない・いない	4.3%
その他	1.7%

がもっと多く、次いで種々の友人関係が多くなっている(表5)。図4で学年別に比較すると、1年生の場合は、「親」がもっと多いが、入学直後の対面接触機会が持てなかったこともあり「昔からの友人」がこれに次ぐ。2年生以上がクラスやゼミの友人に相談できることと比べ、今年の1年生が友人関係を早く確立しえなかったという課題がわかる。6つの大学の合計ではあるが、相談事全般になると大学教職員の比重は決して高くなく、友人関係によって解決する傾向が強い学生たちにとって、対面での交

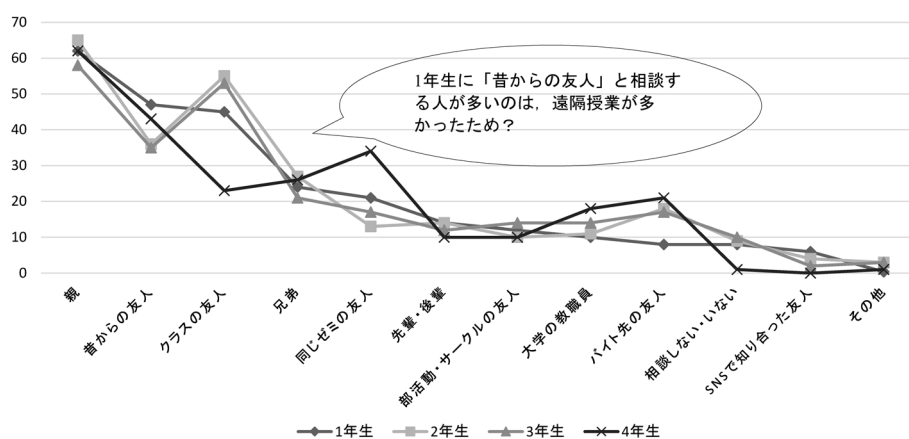


図4 困りごとの相談相手(複数回答, CCP6 調査)

表6 春学期成績低群と高群の7月調査の平均値とSDおよびt検定の結果

	成績低群		<	成績高群		t 値
	M	SD		M	SD	
【大学適応感】						
うまくいっている得点	2.62	0.68	<	2.84	0.65	-3.72***
【対人関係】						
対人関係計	1.89	1.14	<	2.31	1.28	-3.95***
【学習】						
授業得点	2.27	0.45	<	2.47	0.39	-5.41***
課題準備時間労力得点	2.64	0.80	<	2.88	0.68	-3.72***
【心身の健康】						
睡眠得点	2.44	0.53		2.52	0.47	-1.81
食事得点	2.27	0.58		2.36	0.57	-1.67
心身の健康得点	2.51	0.52		2.54	0.48	-0.80
情緒不安定性得点	2.52	0.91		2.53	0.90	-0.17
自尊心得点	2.71	0.85		2.76	0.76	-0.78

*** $p < .001$

流機会を持てなかったことの影響は大きいと言わざるを得ない。

5. 困りごとを抱えた1年生をどのように把握するか

1年生は学生情報が限られている学年である。加えて2020年度はコロナ感染拡大防止のために様々な行動制限が課せられたことで、コミュニケーションの機会は減少していた。

その結果、例年と比較して心身の健康状態が思わしくない学生が増加している。このような中で個別の支援が必要な1年生の特徴を把握し、早期にサポート体制につなげることは、これからの大学への適応や、学習への動機づけを高める意味においても非常に重要であろう。表6は1年生に対して7月に実施したアンケート調査を得点化し、春学期成績高群と低群を比較した結果である。有意差がみられたのは、学習の習慣や意欲、姿勢に関する得点と学内における対人関係、そして大学生活への適応感であった。一方、心身の健康については有意差が認められなかった。本学では入学前課題の達成状況や、基礎学力を測定するテストの結果、アンケート調査の結果等、1年生の情報を紐づけて一元化し、それぞれの学生の困りごとに寄り添うことが可能な体制作りを始めている。このコロナ禍において、学生それぞれの特徴を把握する試みは、今後ますます重要となってくるであろう。

6. 大学が取り組むべき今後の課題

以上の結果から、コロナ禍における初年次教育が取り組むべき課題について検討する。

第一に、初年次生と大学をつなげるための工夫である。対面授業の開始だけでは大学への帰属意識を高め、大学への適応を促進するには不十分である。友人同士の間人関係や学習過程における協働経験は極めて重要であると考えられる。通学の開始は学生間の人間関係を促進したものの、こうした友人関係、さらに先輩や教職員とのつながりが希薄な1年生が数多く存在する。対面的な学習環境は知識理解という側面では必ずしも必要不可欠で

はないかもしれないが、困りごとの相談や知識やスキルの習得感といった面では極めて重要である。こうした協働関係や信頼関係を構築させる機会や仕組みを遅まきながらも提供していく必要性が、今年度入学生にはひときわ高いといえよう。

第二に、コロナ禍における初年次教育の方法について早急に検討をする必要がある。ニューノーマルにおける授業方法の工夫と改善である。遠隔、対面、ハイブリッドの授業形式については、1年生の大学適応を考えると、大学への通学機会を保った上で、新型コロナウイルス感染症拡大の状況に応じて柔軟に対応する必要があるだろう。授業運営については感染予防のため制限があるものの、学生にとって学びやすい授業スタイルを模索し、工夫を積み重ねていく必要があるだろう。このことは1年生の教育に限った課題ではないが、大学の学習スタイルそのものに慣れていないということも勘案して授業方法を再検討する必要があるだろう。協働をどのように組み込んだ授業を構築していくのか。理解度の違いについてはコロナ禍を契機に、AIも活用した個別最適学習の重要性がさらに高まることが予想されるが、学習者同士の協働関係を組み入れた学習方法を、授業形式を問わず取り入れていくことが必要となっている。

第三に、来年度の初年次生を対象とした早期サポートの準備である。大学における学びに初期段階でつまづくことは、その後の大学生活への適応に大きな影響を及ぼす。遠隔授業による新学期の可能性について考慮しつつ、どのような状況や授業形式になったとしても、各々の学生の特徴を把握するための手段を用意しておくことが望まれる。

最後にメンタルヘルスへのアプローチである。長引く行動の制限とコロナ感染への不安は、学生の心身に負の影響を与えている。メンタルヘルスは大学生活の土台となる。一次予防の観点から、全学生に対して心理教育の導入等を検討することが必要であろう。

新型コロナウイルス感染症拡大への対応に追われたこの1年は、大学への適応の促進を目的とした初年次教育にとって、これまでに築きあげてきた方法論を見直さざるを得ない年となった。しかしながらコロナ禍を経験したからこそ生まれたアイデアや工夫もあった。それらの知見を共有し実践を積み重ねることで、ニューノーマルにおける初年次教育が初年次生の実りある学生生活のスタートラインとなることを願ってやまない。

謝辞

CCP6の安全安心分科会で調査票作成、分析にご参加いただいた名桜、富山国際、共愛学園前橋国際、関西国際の4大学27名の学生と、共に指導にあたった田中綾子関西国際大学講師に感謝申し上げます。

参考文献

文部科学省(2020)「大学等における後期等の授業の実施状況に関する調査」文部科学省 2020年12月23日.